

第 6 号

昭和31年2月25日發行



發行所  
高萩市役所  
編集課  
農林印刷所  
藤枝印刷所



前収入役 吉久保喜夫君の死を悼む

梅花綻びて陽春も間近かに迫る一月三十一日午前七時の鐘は噫  
（呟き）て、時計飛行（へいこう）する（長壽）（ちじゆ）と書かれた時計の音

え新愛たる前高利市收の御景夕佳喜大君がこの時幸の余音の消  
えると常に永遠に不帰の客となつたのであります。  
いま私は君がわが茨城県に、また高萩市に残された数々の業績と  
音へ丙に見、又、昔の愛に其語と市に残りつゝ、古の愛する

君は若くして公職に身を奉り、明治四十二年九月多賀郡屋に就職大正元年九月には郡書記に栄進、地方自治のため研さんを積まれ、大正十三年十二月には茨城県員となり会計課に勤務、大正十一年七月總務部会計課長に昇進され、十一月には茨城県會計課長に任命され、現在に至ります。

君が如何に奮闘して新規に申込が何倍かと金額が引用される事に、必ず貢献したことは、事務の完璧を期され、その手腕力量は本県内は勿論、他県にまで名声を輝かされ且又他吏員の常に尊敬の的であつたのであります。國家は君のこの功績に対して正七位勲六等の榮誉を贈られました。

て公平无私な性格により人事部次長の手腕を發揮されました。ひるがえつて家庭にあつては三男一女の父として御子息御令嬢の育英に努力され良き父として又良き夫としての存在があつたのであります。

君は地方自治制度改正直後の財政問題に卓越した手腕を發揮し健全財政確立に不斷の努力を拂はれ、又県下の收入役会に於ては講師として後進の指導に或は新制度の研修に盡される等君の職務遂行による有形無形の成果は多大なものがありました。

また市予算の執行については常に資金運用に留意し経常なる詰置と正確な車両とによって地方財政窮乏の中につきては常に感謝に堪えないと存じます。

に付て取扱いの徴収、貯蓄、支取等の事務は、市長が自ら監督するが、その限りをつゝく治療といためられたのが地方自治権に会計責任者として輝かしい幾多の業績を残して永遠に旅立たれたのであります。想うに君は公務員として具備すべき重要な條件の凡てを備えられた稀にみる名吏である。

誠に残念でならないと共に高萩市初め茨城県にとつても大きな損失であつて三万市民齊しく哀悼の情禁じ得ません。君が最後まで公務に盡した殉職の精神は永劫に滅びないと存じます。君が生前の功業により二月三日市民最高の榮養である市錦の札を以て御冥福とする所に當るに關する事は別段問題ないと思ふが、さういふ意味で此の手紙を書くのである。

君が生前の功績により一月三日市民最高の榮譽である市葬の礼を以て御冥福をお祈りしたのであります。こゝに市民各位とともに地方自治のためにその半生否終生を捧げられ、六十三才を一期として逝去された君の死に対し心から哀悼の意を表するものであります。

高萩市長 小峰威夫

## 祭禮の統一について

鈴木重忠

旧正月が目前にせまつた、先般行はれた市のアンケートの結果は判らないが依然として年に二回迎へる正月である、私は先で暮していた頃一年に三度お正月を祝つた事がある、それは偶然に新旧と月おくりにぶつかつたからだ。

秋のある日字内の知人二人から氏神祭の招待をうけたそれは鎮守祭の外に氏神祭を態々各部落十戸戸の小単位) 日を代へて行ひお互に招待し合つて懇親の機会をつくる風習の一つである、祭鎮守の祭氏神何々祭お盆、お彼岸と十指を屈するに余りある農村における祭それは大いに飲み、大いに食い、大いに語る唯一の楽しみの機会なのである、然し時代は移つて行く映畫、音楽会、芝居、演芸会、野球、卓球、運動会、ラジオテレビ等々目まぐるしきまでである。慰安の機会に恵まれこそそれ楽しみに事欠かぬむしろその擺振と余暇を生み出すのに苦しむのが現状ではあるまいか。

祭それはたしかによい風習であり楽しい行事である、だがあまりに重なる事によつて經濟的の負担にあへぎ楽しみが苦しみとなる逆効果も見逃せない事実であらう。殊に招待された客となる一、二人はよいが家族特に婦人にとつては大なる勞力となり苦勞の種となる。最近部落毎の氏神祭等も招待を止めて家族の静かな安息日とする家が多く見受けられるやうになつた。支那のお正月は表の戸を閉ち一切の往来を止めて家族団らんの日とする習慣がある。年始客は表の戸や門扉のすき間から賀状又は名刺をさし込んで行くだけである。学ぶべき点があるのであるまいか、おそらくこの国へ行つても日本ほど祭の行事の多い国はあるまい。日本には八百万の神がある人々お祭していたら年中お祭である。町村合併が時代の要求であるように行事の簡素化も時代の進化に伴ひ当然なさねばならぬ重要な事である此の際祭も市一円少くも各町(部落)毎に統一し敬神の美風を高揚すると共に心豊かに安息の機会を得るよう改むべきでないだらうか、こうした動きは全国的氣運でもある。

(市農業委員、住改善下君田部落代表者)



方で多賀農業協同組合連絡協議会主催で多賀郡農協婦人部結成大会が開催された。その席上、農村婦人と生活改善と題して早大教授今和田次郎先生の講演があつた。何か皆様の趣ともなれば存じまして先生の講演の中から箇條的に大要を記してみよう。

【一】衣改善について

「簡単朴素を以て礼儀の最高とする」これが私の信念である。曾てアメリカ大使からお茶の会に招待されたジャパンパー服以外に持合せのない自分は出席しようか迷ったが、断られたら引返すまでどうやんばー服で出席した処へ歓んで迎えてくれた。この時の感想の在りのまゝを筆にまといながら引返すまでだ。

業経済新聞に掲載してアメリカ大使から謝辞を受けたことがある。

孔子の教えはエラト人も下級の人も同じでなければならぬ。清潔であれば型はどんな服でも決して失礼となるものではないとは私の

早大教授

今和次郎先生の講演より

*Journal of Health Politics, Policy and Law*, Vol. 35, No. 4, December 2010  
DOI 10.1215/03616878-35-4 © 2010 by The University of Chicago

持論である。ジヤンパーは活動的であり軽快であるのでいつも愛用している。生活改善はこうした些細なことが大切で質素で生き易い衣服でありたいと思う。そうして背広服とジヤンパー

封建的な風習などによって、時代の服装もこれにならつたことが現在も続いているのである。

に併くと共に人生を有意義に過ごす是養齋のあるものである。主眼として食事のときには栄養価について必ず詰合つてゐる。

搬入室と云ふものなどと云ふことはなくして茶室、寝室、台所に金をかけるべきである。しかし改善することは旨悪では簡単だが実際に行うには、そうたやすくは出来ないことで、ある程度の経済が基礎とされねばならない。

と思ふ。また新築の場合家相などの迷信にこだわらず、土地とか地域とか環境に応じ地理的必然の形態を良く考えて科学的判断の上にたてて設計すべきことは云うまでもない。

在本居宣長の著する『江戸の風土記』によれば、江戸の光宗のとき、三勘交代の制度を作った。即ち一年置きに度をつくり、江戸と自藩に住むのみか、江戸に居る一年は妻とも別々に暮さなければならぬ。その結果が芸者をつくり花魁をつくり、二號、三號をつくりつて、それが当然のよう風習となつた。このような状態から妻も夫を迎えるときに芸者のような假面装束をし花魁のような髪を結

三 公民館の活用について  
公民館はめいめいの家であり、座敷であるようにしなければならない。村のホテルと云うようになりますことで座敷が多くとり、村の集会は勿論、結婚式でも来客の宿泊や接待でもなんなことでも出来るように施設をしてみんなが利用することである。そうすれば自分の家は寝室

品名	必要費	娯樂費	合計
	円	円	円
さんま	10	0	10
さしみ	10	40	50
セーター	1,200	1,300	2,500
	栄養価、材料原価	うまい。見た感じがよい。色彩 がきれいだ。	評価して家族全員で成分や材料の原価を かる。

と、茶の間と台所、（調理室）があれば良いわけである、講習講話会や講演会をするなどのみの場であつてはならない。

対し、これを住宅本位にす  
るためには如何に改善した  
らよいか。

三、建築上より見て既に建  
て替え又は修理を必要とす  
る個所が多分にある場合、  
その部分を如何に改造する  
か。

四、使用勝手の上で現在の  
文化的施設を探り入れ、旧  
來の住宅を一層住みやすくす  
るには、どうゆうふうに外  
理したらよいか、等である

三、台所が立派である。設備も完備している。元費を省いてあってよい。これは前に述べた通り不要な室はとらず客間などにかかる床の間とか、応接間と云つたものに、むだな経費は一切かけない。こうした費用を全部合所にかけたわけである。

員で成分や材料の原価を  
必要費と娯楽費とにわ  
いだ。見た感じがよい。色彩

考に供したい。  
現在の文化的施設を取り入れて簡易化し得る処は出来ることを先づ第一に考えなければならない。  
た生活を愉快にすると云ふことを先づ第一に考えなればならない。  
住改善で特に留意してほし  
いことは、  
一、衛生的見地から何処を改善しなければならないか  
二、農家の場合、農家經營上、敷地一単位が余りに工

手入にしても誰に東郷されることもないし、碁、将棋のよう相手がなければ出来ない娯楽でもなく、一人で楽しみながら手入れも出来て健康の為にも非常に良い。

二、図書が多い

一年間に身長の高さだけ恋愛小説を読む。若返り法の一つとして又青春を失なわざ健康で傍っこことが出来るからである。

この費用は最安のもの

く休むと共に人生を有意義なものにする。  
に過すことである。食物は栄養価のあるものを主眼とし食事のときに栄養価について必ず話合つていい。  
被服についても原材料費は必要経費であり、色彩は娯楽であるよう、うまい御馳走は娯楽である。娯楽とは氣分を朗らかにすることであり、食物の必要経費とはよく休むように健康にする成分を云う。それで家計簿のつけ方でも次のようない方法で記入して娯楽費をより多く採るよう心掛けている。

我が家と云ふよんだと云ふ。はなくて茶室、寝室、台所に金をかけるべきである。しかし改善することは言葉では簡単だが実際に行うには、そなたやすくは出来ない。こと、ある程度の経済が基礎とされねばならないのだが、それだけ使つた金に倍加して、生活が能率化され、幸運化される積極性を持つ事である。だから前にも云つた通りむだな家の冗費を省いて積極的に有効に金を使うことが住宅の改善だと思う。

また新築の場合家相などの迷信にござわらず、土地とか地域とか環境に応じ地理的必然の形態を良く考えて科学的判断の上にたつて設計すべきことは云うまでもない。

【五】 私の家を訪問してどなたも驚かれるることは一、庭が綺麗である。居宅より門まで十間ほどあるが全部花畠として四季折々の花を咲かせている。これは家族員が楽しめることゞ來訪された客人に喜ばれ、こゝろよい感じを与え



## 祭り合同と新生活

大和田 菊

今年もまた間近に迫つたお祭りについて改めて話題が返り咲いて来た。編集者は私にこれを書けとの話をされた。併し正直のところ私は書くことに少しも興味を感じなかつたのです。理由は合同祭は既定の事実であり、みんな四月十日に実施しているから。

よつて私は書く責を果すため書く必要がないかも知れない事を私の日記をたより乍ら書いてみる。

先づ昭和二十四年一月二十日には婦人会、青年会、文化クラブの代表者たちで町後援会の下に祭典合同促進

協議会が結成され役場で第一回の会議を開催した。次

は二月十五日再開。一日お

いて二月十七日には氏子総代(石丈之介氏、矢代子之吉氏、金沢謙一氏等)の方々と懇談のかたちで協議、

その席上當時文化クラブ幹部の花園氏の研究(四月八

日はお祝儀様の合せた事、それ以前は八日でなかつた事、神ごと日は一日か

十五日が多い事、四月十五日は気象統計上晴天が多い事、桜花爛漫でもある事等

の科学的調査)発表をし、また一同も共通した意見として、(一)棟つよきである安良川高萩が一線を境に御輿が

最初問題を孕んでいたかと思われる十五日とゆう日は安良川八幡の祭りの日だつた為め美事に打ち破られ二十六年もと共に支離滅裂の状態とはなつた。そ

こで二十七年になつてから

今度は町当局(学務課)の手によつて新たに町民にア

ンケートを出し解答を求め

た。

(イ) 八日がよいか

(ロ) 十五日がよいか

(ハ) 十日がよいか

結果が絶対多数で十日案が

支持されたので以来十日と

訂正して今日に及んでいる

ときく。まつこの間八日支

持者の手によるボスター

と、十日支持者の手による

ボスターの貼り合い、八日

一日再度氏子総代と会見し

これを示して祭典合同期日

は四月十五日と初めて本決

りしたわけだつた。一方一部の反対者には趣意書を持

ち手分けして訪問する事と

しまつた町民には回覧により

周知を図つたのは云うまでもない。

さて四月十五日の当日は町

民にとつて、なじめない日

ではあるが晴天。とともにか

くにもこの月挙行され(勿

論八日に行つた一部もあつ

た)各種団体では幾つかの

行事も織り込み、文化クラ

ブでも小展示会とか夜は、

「町内親睦リクリエーション大会」が盛況で、有志

の方の寄附も頂いた様に私

の日記には書いてある。

二十四年は以上の様なわけ

であった。さて二十五年は

階としては誠に妥当な意見

が情操陶冶となり人心を益

する事の方が多い。だから

祭りそのものは誰も否定せ

ず、唯期日を合せただけな

のだから鎮守が怒り給うわ

けもなし、昔は八日だつて

旧暦に行つていたのだろう

から当然期日は動いている

伝統を守る力と破る力との

磨擦は新生活運動によらず

いかと案じられる。

関東名物と云われる馬市は

迨り以上のものであり祭り

ない限りは憤れるのではないか

と案じられる。馬市は多額に要するだろうし、

地方色豊かな(例へば野馬

追いの様な)名物行事でも

ない限りは憤れるのではないか

と案じられる。

そこでこれはこれで別に考

へなければならないかも知

れない。

古い伝統を破つたかも知

れないとどう誇りに満ちて

位に見る。松岡、高岡につ

いてはこれはこれで別に考

へなければならないかも知

れない。

この上は合同により大き

な市が行事を打出すべき

心勞が軽減され肩が軽くな

つていることは事実である。

假に三日開催するか

どちらには市が行事を打出すべき

祭りとして他町村の人の足

を如何に導入するかを市や

商工会等が肝入れる要が

ある。假に三日開催するか

どちらには市が行事を打出すべき

祭りとして他町村の人の足

を如何に導入するかを市や

〇一月二十五日  
昨年の十二月二十六日夜半より二十七日にかけて押寄せた高潮は茨城県より福島県下の太平洋海岸に甚大な被害をもたらした。本市でも高岸の防波堤市約三米延長五十米が破壊されたほか、肥前山地先海岸約六〇メートルが侵蝕され、本日この災害個体の実地調査のため建設省より齋藤技官外建設事務官一名及び県より河港課長補佐牧技官外二名と鈴木一司、鈴木茂両県議が来市した。

調査の結果高岸は三十一年度予算で査定済となり高さ二メートル延長一メートルコンクリート堤防が三十一年度中にでき上ることとなつた。

地理的にみて地勢的にみても我が茨城県は災害を受け易い環境におかれることは事実であるが、それにも年事行事の如くに襲来する豪雨、台風、高潮等がその都度大きな災害をもたらして県は勿論い。しかし本市は台風の被害も稀であるし、利根

堤市約三米延長五十メートルが破壊されたばかり、肥前山地先海岸約六〇メートルが侵蝕され、本日この災害個体の実地調査のため建設省より齋藤技官外建設事務官一名及び県より河港課長補佐牧技官外二名と鈴木一司、鈴木茂両県議が来市した。

調査の結果高岸は三十一年度予算で査定済となり高さ二メートル、延長一メートルコンクリート堤防が三十一年度中にできることとなつた。

川のような大河もなく豪雨はあつてもほんの一時の増水で道路、橋梁の流失も少ないと幸である。

今回の高潮による被害は近年にない大きなものであつたが、今後これ以上の大潮がないとは誰が予測し得よう。

これらの災害を如何にして防止し、その復旧をどうの様に促進するかは当面の問題として市民各々が常に考えおかなければならぬことを附言するものである。

○一月三十日

駅東の都市計画地内に今度初めて市営住宅が建設されることとなり県の融資を受けて、昨年十二月十日起工、本日上棟の目出度に於が午前十時より現場に於て挙行された。

鉄筋コンクリートブロック建瓦葺平屋、建坪六坪のもの八戸（一戸三人世帯居住予定）は日興建設の請負で、木造瓦葺平屋、建坪八坪のもの十戸（一戸五人世帯居住予定）は沼田工務店の請負で竣工は三月末の予定である。

この都市でも又農村の僻地でも住宅は拂底して

いる。人口はどんどん増加するが住宅の建設は遅々として進まない。その反面火災による損失は年々おびただしい。火災によると住宅の損失は不燃質耐火建築と戸名各人の日々の心構えで最少限度に止めることは不可能で止めることは不可能でないことを願願するものである。

少ない資材と生産力を活用して文化住宅を建設し健康で明るい生活をいたしたいことを願願するものである。

実行と云えば二宮尊徳翁を思い出す。

○二月十六日　國鉄高萩線バス開通式典が高萩高校講堂で山崎前運輸大臣、宮田、郡西参考員、茨城県知事、鈴木一司、鈴木茂両県議其の他来賓多数を迎へ、関係者数百名が出席して盛大に挙行された。

○二月二十五日　阿武隈連山のいでつくよくな白い雪肌の上から吹き下す寒風を真向に受け国鉄バスの新車が悠々と南中郷、横川を通して上君田の終点に向つて試運転が行はれた。

○二月二十九日　今先生は尊徳翁に劣らぬ

新生活の理論や生活改善はこうしなければならないことであることは云うまで

ものがある。

○三月三日　理屈ばかり修めて世間は通れるものではない。國を治むるにも、一家を盛り立てるところに面目躍如たるものはない。

実行、実践をモットーとし

たところに面白躍如たるものがある。

○三月三十一日　実行、実践をモットーとし

たところに面白躍如たるものがある。

○四月一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月十九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月二十日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月廿九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月三十日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○四月卅一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月十九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月二十日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月廿九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月三十日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月四十日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅四日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅五日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅六日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅七日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅八日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅九日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅一日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅二日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅三日　國を治むるにも、一家を

盛り立てるところに面白躍如たるものがある。

○五月卅四日　國